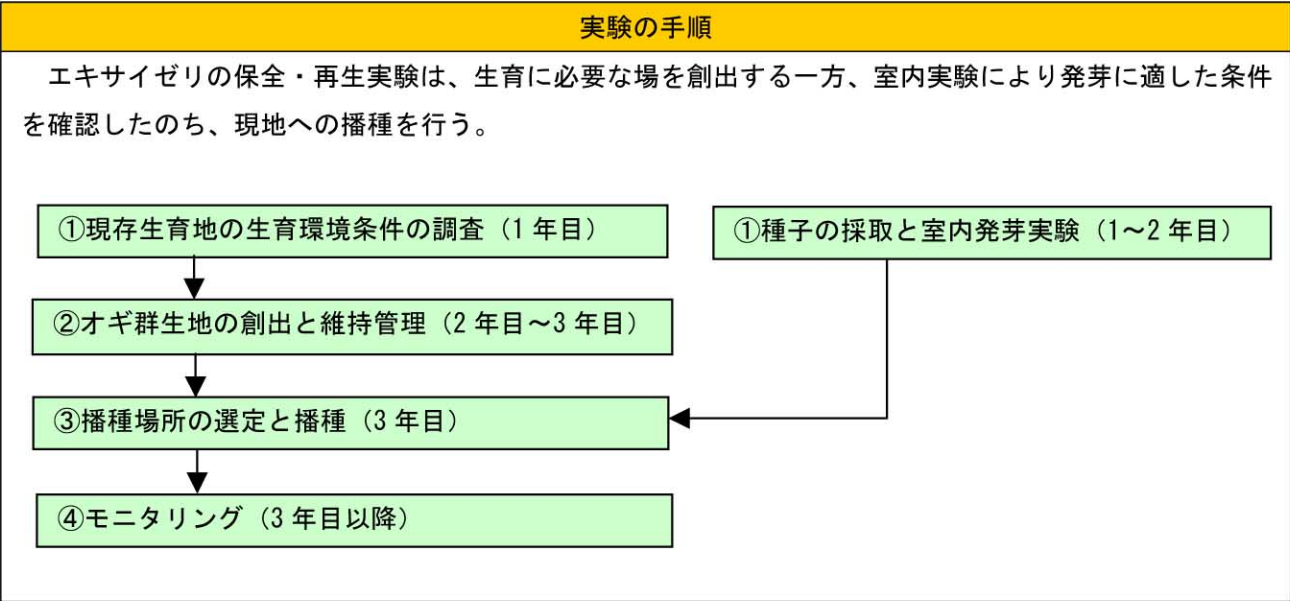


1.3 エキサイゼリの保全・再生実験計画

エキサイゼリの特徴	
分類	セリ科エキサイゼリ属の1属1種の日本固有種（※2）。
分布	関東地方と愛知県にだけ分布（※2）。栃木県、埼玉県、千葉県、愛知県に生育。茨城県、東京都は現状不明。群馬県は絶滅（※1）。関東では、荒川、渡良瀬川、小貝川で確認されている。荒川では、三つ又沼ビオトープ、大久保地区、田島ヶ原、太郎右衛門自然再生地で確認されている。この内、分布の広さとしては、太郎右衛門自然再生地が最大と目される。
形態等	茎の高さは10～45cmで、小葉は1～4対で長卵形～卵形、長さ1～3cm（※1・2・3・4）。根は太く束状に数個（※5・6）。
生活史	日のあたる4～5月に開花し、夏にはほとんど姿が消える多年草（※1・2・3）。
生育環境	河川等の低湿地等（※1・2・3）。オギ群落の下層に生育（※2）。
減少原因	生育地の草刈りが行われないため、光不足で衰弱している個体が多い。また、開発等により生息地が減少したり、消滅したりしている（※4）。



室内発芽試験	
室内発芽実験によりエキサイゼリの発芽に必要な条件を把握する。発芽に関わる条件として、気温、日照、土壌、水分の4つがあげられる。	
気温：発芽に適した条件を試験地で創出できないため、室内実験ではとりあげない。	
日照：オギ原の密度管理が対象となるため、室内実験ではとりあげない。	
土壌：オギ原が生育する試験予定地の土を用いる	
水分：地下水位（または池の水位）との比高に着目して試験を行う。	
図-Aに示す通り、水槽内に浸透性のあるポットを入れ、種を植える。水位をかえることにより、地盤面（種）との比高の違いによる発芽状態を把握する。	

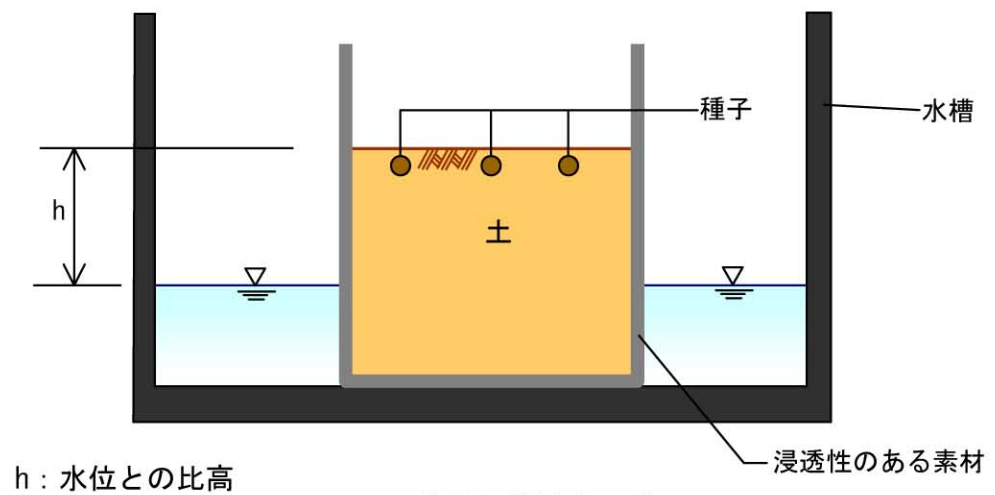


図-A 室内発芽試験モデル図

播種実験方法	
再生時期	開花時期（4～5月）頃に種子を採取し、室内実験を行ったのち、翌年播種を行う。
環境条件	年間を通して湿潤環境が維持されるヨシ群生地もしくはオギ群生地を創出する。ヨシもしくはオギが過密度になると、光条件が弱くなり、エキサイゼリの生育に影響を及ぼすことが予想される。そのため、オギ群生地（もしくはヨシ群生地）の適度な維持管理が必要であると考えられる。
生育環境の調査	再生区域の環境条件を検討するため、現存する生育地の環境条件を調査する。 現存する生育地は、オギ群落の植生区分に含まれることから、オギの個体数密度、水分条件、光条件を調査する。また、エキサイゼリの個体数密度、開花時期、根の形状や伸長深度等を調査する。

再生区域の施工時の配慮事項	
環境条件の創出	再生区域は、年間を通して湿潤環境が維持されるように造成し、オギ群生地（もしくはヨシ群生地）を創出する。 オギ群生地（もしくはヨシ群生地）の維持管理を行い、エキサイゼリの生育に必要な水分条件、土壌条件、光条件を創出する。
外来植物の侵入防止	再生区域への外来植物の侵入を防ぐため、工事に用いる機材・重機等や、出入りする作業員等の長靴等に付着している土を落とすことを徹底する。

【出典】

- ※ 1 改定・日本の絶滅のおそれのある野生植物 植物Ⅰ（維管束植物）（環境省、2000）
- ※ 2 レッドデータプランツ（山と溪谷社、2003）
- ※ 3 さいたまレッドデータブック ―埼玉県希少野生生物調査報告書 植物編―（埼玉県、1998）
- ※ 4 茨城における絶滅のおそれのある野生生物 植物編 ―茨城県版レッドデータブック―（茨城県、1997）
- ※ 5 群馬県植物誌（群馬県植物誌編集委員会、1968）
- ※ 6 日本の野生植物 草本Ⅱ離弁花類（佐竹他編、1993）